

# 漱石・『明暗』試論

——ひきさかれた自己の光と影——

『明暗』では社会と個人との関わりよりも個人の内面を深く追求し、その存在と他の個人との関わりを日常生活の中のみてみる。日常的なものが興味をひくのはその中にひそやかに隠されたものがあつて、それが緊張しているからである。そしてそういう緊張は、いつまでも緊張し続ける事はできない。必ずやどこかで破裂する。そのさけめから人間性はむき出しになる。

しかしながら、私達の中には醜いものを取り立てて生きていくという神経はない。我々が行つてきたのは醜いものを他人にはもちろん、自分にも隠しておくことだった。それ故、出口のない欲求、解決を見出せない己の疑問、それらは人をして他人の前になくはぐな、誠実でも裏切りでもない曖昧な納得いかない態度となつて現れる。

「始終自分を抑へ付けて成るべく心の色を外へ出さないやうにしてめた。そこに彼の誇りがあると共に、其所に一種の不快も潜んでいたことは彼の気分が彼に教へる事実であつた。」(三十二)ここ

金子 みすゞ

に、こういう一人の男、津田がいる。彼はへ心の色を外へ出さないが故に〈不快〉である。そのため〈快楽を人生の主題〉として生きざるを得ない。〈心の色を隠す〉即ち〈自己隠蔽〉である。かつて津田が「選ばれた魂」の持主として自認していた過去は、清子の背反による不信から〈悪徳〉ともいふべき現在の姿に変化してきたのだ。ここでは津田は「たたられている」。そういう津田の素面とは何か、何故の〈自己隠蔽〉 仮面なのか。

津田の内面では、感情と矛盾し合う思考が交錯し彼を迷わし分裂させている。そして迷いから抜け出したいという希求——自由への志向——が彼にはあつた。

ここでは、漱石が我々につきつけた津田という人物のもつ問題、近代としての問題を、悩みを悩むという自己満足ではなく、現実を引きつけ自分の問題として取りあげた。漱石が打ち出した疑問、しようとした仕事が我々に向つて投げられる時、その姿勢を支持しているものは何なのだろうか。

## I 悪への傾斜へ暗い不可思議な力

人間は誰でも自己と身体とを堅く結びついたものとして經驗的に体得している。しかし常にそうだとする訳ではなく、中には自己が身体から離れて存在していると感じる人がいる。前者は「身体化された自己」<sup>(注2)</sup>を後者は「身体化されない自己」<sup>(注3)</sup>を體驗しているということが出来る。

身体化された人間は、自分の身体を脅かす危険を被る主体として自己を體驗する。そして身体的欲望や身体の満足や欲求不満の中に巻き込まれる。かくして人は自分の身体についての體驗を出発点としてもつものである。

では津田という男の身体についての體驗の出発点というのはどこにあるのだろうか。その記憶は、彼の肉体的な「激しい苦痛」の經驗から起想して甦ってきた。

「突然爾方の肺臓から一度に空気を搾り出すやうな恐ろしい力の壓迫と、壓された空気が壓されながらに収縮する事が出来ないために起るとしか思はれない劇しい苦痛とが彼の記憶を襲った。」<sup>(注4)</sup>

かくて津田にも彼が他の人間と同じ様に存在する人間である基礎として肉体的體驗があるのだ。しかしながら、「人間の存在がへ精神」としての自己とへ身体」としての自己とに完全に引き裂かれな<sup>(注5)</sup>いにして、人間は多くの仕方で自分自身に対して分裂しうる存在である。」津田の立場はこの時身体化されない人間の立場に比べればずっと不安定である。なぜなら、身体化が部分的にしか起っていない人間がときに感じる「身体的傷害によって自分が侵されるこ

とはないのだというあの觀念を欠いているからである。」津田は身体的傷害を恐れているのである。そしてその恐れは

「精神界も全く同じ事だ。何時どう変わるか分らない。さうして其變る所を己は見たのだ。」<sup>(注6)</sup>

という心の叫びとなり自分自身が侵される恐れにつながっている。ここにおいて津田は多少とも自己を身体から離れた存在として感じている。つまり非身体的内的自己と、身体的内的自己との二つを體驗しているのである。

心理学に次のようなものがある。「身体から自己がこのように分離してしまうと、身体化されない自己は世界の生のいかなる局面にも直接の参与をはばまれる。そして世界はもっぱら身体の知覚や身体感情や運動によってのみ媒介される。身体化されない自己は身体が行なうすべてのことに対する傍觀者として直接的には何も關係しない。」<sup>(注7)</sup>従って身体化されない自己は意識過剰である。」

ここで津田が身体化された自己か身体化されない自己かという決定をすることよりは、津田が身体化された自己として在り、自己と身体との一時的な分離状態に陥っているととらえたい。その分離状態とは次の様な箇所であらう。

「彼はある意味に於て、此細君から子供扱ひされるのを好いてゐた。(中略)例へて云ふと(中略)快感に近い或る物であつた。」

同時に彼は吉川の細君などが何うしても子供扱ひする事の出来ない自己を裕に有つてゐた。彼は其自己をわざと押し藏して細君の前に立つ用意を忘れなかつた。斯くして彼は心置なく細君から翻られる時の軽い感じを前に受けながら、背後は何時で

も自分の築いた厚い重い壁に倚りかかつてゐた。」(十二)

津田が己自身「自己」と呼ぶものと、他人の前に見せる「みせかけの自己」とは別々なのである。「みせかけの自己」は津田の「自己」をおし隠しておくためのメッキとも仮面ともいえる。

そういう津田には自主的行動ができない。それには自己の立場の決定が必要だからである。ところが「冷静」で「無関心」を装おうとする津田が評するところの理性と、自己の内面を偽る虚偽を自覚する情としての反社会性、そして社会道徳を意識する意志としての社会性、その三つの相矛盾しあう思想が津田の内部で対立しあい、そのどれにも傾けない自己はひきさかれて、偶然の力、好奇心によつてしか行動がとれなくなつてしまつてゐるのだ。そういう自己を暴露することは津田の自尊心と誇りとが許さない。それ故、意識的に自己を隠さずにはいられない。自己隠蔽である。「快樂を求めて人生の主題とする」津田は自己を隠蔽しているため快樂を求めるには興味からの衝動にたよつてしか行動することができない。ひきさかれた自己であるが故に津田は不安定なのだ。快樂と安逸とを求めて精神的に破滅してしまつた者のやりきれない退廃の迷妄である。小林との会話で津田は告白している。「落付けないのは君ばかりじゃない。僕だつてちつとも落付いてゐられやしない。」(三十六)

仮面の自己は、行動ばかりではなく内的「自己さえ呑みこみかねず、かつ彼から大切な自己存在の統御と支配とを奪おうとしてゐる」(三六)

「暗い不可思議な力が右に行くべき彼を左に押し遣つたり、前に進むべき彼を後ろに引き戻したりするやうに思へた。」(二)つまり津田は己の行動を決定するものが己の意志でないことを感覚

として知つてゐるが自覚してゐない状態にあるのだ。津田自身には意識されないが故にそれは悪魔とも呼べるのかも知れない。津田は「自発性の欠如を訴えるが、彼自身が自発性の欠如を助長し、したがつて無用感を増大させてゐるのである。(中略)自分は自分の内部にすっかり封入されて、想像される利益は真の自己の安全、他者からの孤立とそれによる自由、自己満足と統御である。」としてみると、津田という男の内部には、この女を自分が好きだということが観念で納得されていても心の奥底でそれを認めたくないという働きがあるのでないか。人を愛すること、それはその人の一切を背負うことだ。津田はそれ自体に恐れをなしたのだと思う。そしてその人―清子の背反にあつたとき以来、彼は不可思議な力を感じる。

「つまり自己の内部に所有してゐる豊かさに比較すれば、あなたで進行してゐる生は平凡陳腐だと軽蔑するふりをし、その生の「外側」にゐることで一旦優越を感じた人間が、こんどはふたたび生の「内側」に到達したいと切望し、内的な死がいかほどおそろしかろうと彼自身の内側で生を獲得したいと切望するのである。(中略)彼が悩む不安の性質」はこれなのだ。

こういう内側の矛盾した不安が精神への亀裂を生じさせる。精神をも痛む津田の頹廢した不健全な迷妄であり行動の沈滞であつた。そういう津田を危険な衝動へと誘う痛快を喜びとする悪魔がじつと窺つてゐた。

## II 〈へうずくまる乞食〉の虚無

現実とか事実とかいふものは、在るがままの言つてみれば裸の形であるのではないだろうか。ところが津田によれば、彼の自負し

ている処世術ともいふべきものは、いい意味でも悪い意味でも現実より豊富であるという軽薄な偏見に支配されている。津田は次の様に考へてゐた。

「今彼が自分の前に拵けてゐる書物から吸収しやうと力めてゐる知識は、彼の業務上に必要なものではなかつた。それには余りに専門的で、又あまりに高尚過ぎた。(中略)彼はただそれを一種の自信力として貯へて置きたかつた。他の注意を惹く粧飾としても身に着けて置きたかつた。」(五)

現実というのは内的現実であつても外的現実であつても、人間の知識というやうなものに比べたら、比較にならない程豊富でデリケートなものだ。そういう知識を越えた現実を前にして、知識で計つた処世術、渡世術とかいふものの貧弱さを痛感するからこそ、そこで自身の生き様をあれこれと思ひ悩まざるを得ないのであつて、要もないのに身につく粧飾ではないのだ。つまり、氣どりがる人間の容姿ではない。もしも現実よりも知識の方が豊かなものであるとすれば、何か事件にぶつかった時には知識を捨てればいいわけで、ここに至つては処世術すら生まれてこないではないか。現実はいつも何よりも豊富なのである。

しかしながら、津田のように己自身を分裂させてしまった人間は、その着眼してきた処世術という頭でっかちな知識の重さで動きがとれない。それは氣どりが屋が自分のスタイルを氣にして現実の切実な動きに注目できないのに似ている。

人間にとつて自然(自ら然り)現実とは、日々新たなものであるはずだ。そして個々にとつてのそれは別々で特別なものであるはずだ。己が己自身であるためには、つまり自己に忠実でありさえすれば

ばいいのではないか。津田は大儀ぶつて、知識を云々、処世術云々として頭の中だけで生きており、そういう頭でっかちな重みに耐へることで精一杯なのだ。氣どりがりを自分で背う一方で、自分の精神の氣どりがり——独特のスタイル——を表わすことを恐れている立身出世主義の男。立身出世のためウソを背い、己を粧飾する知識を身につけ、恵まれた容貌ももち、あらゆる場合に自分に従つて行動してきた津田。ところが、一度、己の己たる自己の命ずるがままに求めた女——清子との結婚に事実裏切られた時、己が己を偽つてきたところのすべてが崩れてゆかねばならなかつた。そしてその瓦礫の中に残っているものは、清子への疑いなき未練なのである。

精神と肉体とを分裂させてしまった津田、その悲しむべき亀裂の深みで彷徨う魂が不安がつて自己を苦悩させる。津田が自分の不安に対してそれを考へるべく正面を向いたとき、自分の状態が〈夢〉ではなかつたかと思つた。それは、清子に逢いにいく途中、一人で歩きながら起つてきた感情である。

「おれは今この夢見たやうなものの続きを辿らうとしてゐる。東京を立つ前から、もつと几張面に云へば(中略)実は突然清子に背中を向けられた其刹那から、自分は今もう既にこの夢のやうなものに崇られてゐるのだ」(百七十一)

と想う。そうして、

「今丁度その夢を追懸やうとしてゐる途中なのだ。(中略)自分の夢は果して綺麗に拭ひ去られるだらうか。自分は果してそれ丈の信念を有つてこの夢のやうにほんやりした寒村の中に立つてゐるのだらうか。」(百七十一) (傍点金子)

津田が自分のおかれた場所で、大きな闇の中ですべての事実を〈夢〉と感じた時、自己の意志のありかを疑ってみたのである。自分の信念をもってこの暗闇ともいえる現実の一年間を顧みれば、すべてが隙縫として確実なもの一つもない。ここに至ってみて津田はこの動かし難い事実から、自分がこれまですべてを己の意志と行動で運んできたと思つたのは、実は運命ではなかったかと思つたのだ。彼が意識して自分の主人公となり己をみつめようとした時、そこには既に己の生そのものを戦おうとする者の意志はない。今までの意識と今までの行動との間に生じている、すきまを感じている津田は、それをここで〈宿命〉ではないかとらえてみたのである。

「ちや何のために兩の東京を立つてこんな所迄出掛て来たのだ。畢竟馬鹿だから？ 愈馬鹿と事が極まりさへすれば、此所からでも引き返せるんだが。」(百七十一)

馬鹿になる事、それは己を露出して生きる事なのである。漱石の言葉で言えば〈露悪家〉<sup>(金)</sup>となることなのではないだろうか。〈露悪家〉として生きることは、ある意味においては楽なのであるが、津田のような人間にとっては重大決心が必要なのだ。そしてそれを実生活において実行しているのが小林なのであるが、彼については後に論を譲るとして、果して津田は馬鹿になる事ができるのだろうか。否である。なぜなら津田は小林を、

「陰晴定めなき天氣を相手にして戦ふやうに厄介な此友達、もつと適切にいふと此敵、の事を考へて、思はず肩を時だてた。」(百八十二) (傍点金子)

と評するように敵としているからである。〈夢〉のような状況を〈宿命〉ととらえた津田にとって正反対の極みを生く小林は敵とせ

ざるを得なかったのだ。そして一面では羨望の対象となつたはずである。津田は今では馬鹿にもなれないし引き返せもしない、又現状に満足もしていないのだ。それは何故なのか。

私達は決定的にこの時代に生きている。そして津田も又、決定的にこの時代に生きている。しかし彼はそれを決して見ようとはしない。現実の瞬間は津田にとって真空地帯であるのだ。そこは様々な視点から生ずる思想の集積地であるともいえる。意識は生活に逆行しようとしているが、彼等は確実に生活しているのだ。その状況こそ津田の感じた〈夢〉なのである。そしてこういう状況を〈夢〉と認識すること、無意識な感覚が明瞭な意識の上に浮かび上がってくると、そういう事実は本人にとって一つの覚醒であるとはいえないだろうか。だが不幸にして、こういう覚醒の如き一瞬はたちまちにして去ってしまう。

「半分と掛らないうちに、是文の順序と段落と、論理と、空想を具へて、抱き合うやうに彼の頭の中を通過した。然しそれから後の彼はもう自分の主人公ではなかつた。」(百七十一)

一瞬の覚醒が津田をして明確に現実へとたたき起さないので何故だろうか。

それは津田の深層の精神に食い込む情報が生みだすところの、津田だけに通用する一流の問題意識がこれまでの彼に欠けているからではないか。そしてそういう情報はやはり、一流の場所であらうから入ってこなければ深層の精神に食い込むことはできない。まさに清子との再会でなければならなかつた。

〈夢〉という津田の意識は清子と逢つて覚めるのだろうか。〈夢〉の中の津田があてもなく旅館中を彷徨つて己の實在と出合

うのがこの鏡の場面である。「大きな鏡に映る自分の影像」それが津田にとって意外だったのは、鏡に向う時、彼はいつも「目鼻立ちの整った好男子」で「顔の肌理も男としては勿体ない位濃か」な所に「自信を有つていた」ところ、湯上がり後の後なのに顔色はむしろ蒼く髪はまるで「暴風雨に荒された後の庭先らしく」彼にとつては不満な姿を確認したからであった。この時津田は、鏡の中の相手は自分の「幽霊」だという思いにとられる。その相手への反抗は、

「すぐに二足ばかり前へ出て鏡の前にある櫛を取り上げた。それからわざと落付いて綺麗に自分の髪を分け」

という行動によってあらわれた。

津田をこういふ行動に導いたもの、自分の現実を映した鏡の中の自分を「幽霊」だと思ふ心の動き、その根底には現実の自分に対する抵抗、それどころかもっとずっと激しい現実の姿に対する拒絶があるはずだ。「妻くなつた彼には、抵抗力があつた」と漱石は書いている。鏡に映つた己が自分ではない、「幽霊」だと思ふ時、だから「わざと落付いて」シニカルにも髪をときつけてやるのではないか。ここではもう自分の肌のきめに満足するようなナルシストなどではなく、それを突き抜けた嗜虐性さえもみえてくるのではないか。それもまた、津田に作用する「暗い不可思議な力」なのだ。津田は「再び自分の室を探す故の我に立ち返つて」いく。

やがて津田は、「普通のものより幅が広く」「厳丈」で立派な階段の下にいた。しかしながら彼はこの階段だけは決して降りなかつた人であった。確かな記憶のうちに、この階段は登つても「自分の室へは帰れないと気が付い」て後戻りを決心したのである。とりも直さずその階段は清子のいる室へと続く階段であつた。このことを

考え合わせてみれば、この百七十五章があるものの象徴であると読めるのである。

「今迄も夢、今も夢、是から先も夢、その夢を抱いてまた東京へ歸つて行く」(百七十一)

こういう妄想、「夢」にたられたまま、己の居場所を求めて彷徨い、時として清子という津田の追い求める理想化された抽象への階段の下で、上を見上げては後戻りしてしまふ物問いたげな津田の姿。それは吉川夫人を訪ねて行った日の帰り、

「また彼女に会ひに行く勇氣はなかつた。電車を下りて橋を渡る時、彼は暗い欄干の下に蹲踞まる乞食を見た。其乞食は動く黒い影の様に彼の前に頭を下げた。(中略)けれども乞食と彼との懸隔は今の彼の眼中には殆んど入る余地がなかつた。彼は窮した人のやうに感じた」(十三)(傍点金子)

ようなへうぜうまる乞食ではないか。そのままでは何事をも成し得ない、何ものも生み出せない深い空洞——精神の虚無を抱えていたのである。

### Ⅲ 〈天然自然〉の存在

津田は清子とどのような再会をするのだろうか。

「一室の障子を開けて、開けた後を又閉て切る音が聴えた。

(中略) ひっそりした中に、突然此音を聞いた津田は、始めて階上にも客のある事を悟つた。といふより、彼は漸く人間の存在に気が付いた。今迄丸で方角違ひの刺激に気を奪られてゐた彼は驚ろいた。(中略) 性質からいふと、既に死んだと思つたものが急に蘇つた時に感ずる驚きと同じであつた。(百七十六)

津田が氣を奪られていた方向違いの刺激、それは人間存在のベースとは離れた津田の不完全な官能が抑圧された時にあらわれた残忍性とか嗜虐性とかいう未解決の精神の興奮であったのだ。このような状況にあって津田は、己自身を一個のものにして、生命体であることを忘れ、又自分をも見失っていたのである。自分も、自分をとりまく世界をもすべてぼんやりとして昏い漠としたつかみどころのない中を夢中歩行者のように彷徨っていた故に、確かな生命の動く物音に既に死んだと思ひ込んでいたものが「急に蘇った時に感ずる驚き」をふっと感じたのである。

「彼はすぐ逃げ出さうとした。それは部屋へ帰れずに迷児ついでゐる今の自分に付着する間拔さ加減を他に見せるのが厭だつたからでもあるが、実を云ふと、此驚ろきによつて、多少なりとも度を失つた己れの醜くさを人前に曝すのが耻づかしかつたからでもある。」(百七十六)

仮面をかぶった津田が自分の本当の姿、虚飾を取った裸の姿をさらすのは最大級の屈辱なのだ。現実の自分が今までしてきた行動が〈夢〉だと感じた時から、失つたものへの執着と自己の中に潜るといふ退行が生じたのだ。本当の自分の姿を見失つてしまつて自分の居場所がわからない〈迷児〉になつてゐる津田。それは〈迷児〉という現実と、精神的にも〈迷児〉であるという内実、二つの意味で〈迷児〉なのだ。そんな津田の正体を見られたら、彼の仮面はもうそこでは仮面ではなくなる。仮面とは、「己れの醜くさを人前に曝す」のを防ぐための変装なのである。

「其時彼の心を卒然として襲つて来たものがあつた。

〈是は女だ。然し下女ではない。ことによると。……〉

不意に斯う感付いた彼の前に、若しやと思つた其本人が容赦なく現はれた。(中略) 彼女が何気なく上から眼を落したのと、其所に津田を認めたのとは、同時に似て実はず同時でないやうに見えた。(百七十六)

この時の清子の反応は明らかに驚ろきであつた。自分が恐れ忌んで離れた相手の素面とその上を覆う明らかな仮面、それを再び目のあたりにして恐怖にも近い驚愕に包まれたのだ。津田とはこういう男だつたのだ。清子のこの拒絶に遇つた時、津田は彼女を自分の心の奥深く忘れ得ぬイメージの一つとして沈めたのである。それは一枚の絵の如く鮮やかにいろどられた強烈なあこがれにも近い姿であつた。

「階上の板の間迄来て其所でびたりと留まつた時の彼女は、津田に取つて一種の絵であつた。彼は忘れる事の出来ない印象の一つとして、それを後々迄自分の心に伝へた。」(百七十六)

人は時として内心の理想を、視覚的な表象を通してそのつかみ得ぬ内側の相念から確認し、意識の上に解放することによって恐怖に對抗しようとするものなのかも知れない。かつて『三四郎』の中で広田先生も云つた「あなたは絵だ」と。そして広田先生はそれを自分の内側の世界に沈めて一生を一人で過してきた人である。〈夢〉の女は「あなたは詩だ」といった。しかし彼は、「詩を解さない人」であつた。広田先生は「偉大なる暗闇」だといふ。暗闇のみみ込んでゐるからだ。しかし津田は暗闇のみみ込まれてしまつてゐる。津田のみみ込んだ暗闇は何者をも生まない空洞であつた。清子はそれを忌んだのだろうか。

「清子の身体が硬くなると共に、顔の筋肉も硬くなつた。そ

うして両方の頬と顔の色が見る見るうちに蒼白く変つて行つた。(中略)津田は思ひ切つて声を掛けようとした。すると其途端に清子の方が動いた。くると後を向いた彼女は止まらなかつた。』(百七十六)

これが片時も忘れられずに一年間を過した清子との運命的な再会であつた。その夜、津田は布団の中で自身を振り返る。「夢中歩行者」の如き津田が迷兎になつてふみ迷っている時「清子を何処かへ振り落した」のだ。彼女の態度は「凡てが警戒であつた。注意であつた。さうして絶縁であつた。』(百七十七)けれども清子のこの様子に「複雑な過去を觀面に感じて」いるからではないかと「望み」をつなぐ「己惚れ」た津田がいた。「己惚れ」と「幻滅」という「自然天然属性として二つのもの」に「遠近の差等」があつたのだ。これが人間というものかもしれない。そういう実存を漱石も見つめていたのだからと思う。こうして津田は妻延子と、過去の女清子とを比べてみることとなる。

次の朝女中から聞き出した温泉での清子の生活は、昨晚の出会いとは縁のないものであつた。津田はいよいよ清子に会う決心をして吉川夫人からの果物かごを口実に再会を果たした時、「二人の間に横はる運命の距離」(百八十三)を感じている。彼女は「何時でも優悠してゐた」というよりむしろ「緩漫」であつた。津田は「常に其特色に信を置いてゐた」し、今でも無自覚の間にその信は残つていたのである。相手が延子なら「又何か細工をするな」と思い、つい技巧で対抗しようとするが、清子である故に「もう胡麻化すという意識すら」無い。再会のいきさつを説明する津田の言葉をそのままに信じて「微笑した丈であつた。」「相変わらず貴女は何時でも苦がなさ

さうで結構ですね」(百八十四)と何か皮肉を言いたげな津田の言葉にも「だつて同なじ人間ですもの」と答えて苦にする様子もない。もしもこれがお延であつたら、と津田は思はずにはいられない。

「彼女は津田に一寸の余裕も与へない女であつた。其代り自分にも五分の寛ぎさへ残して置く事の出来ない性質に生れ付いてゐた。彼女はただ随時随所に精一杯の作用を恣のままにする丈であつた。勢ひ津田は始終受身の働きを余儀なくされた。さうして彼女に応戦すべく緊張の苦痛と努力の窮屈さを嘗めなければならなかつた。』(百八十五)

津田はこういうお延に対する時の用意、用心を忘れ話題は清子の家庭に移っていく。「時々二人して貴方のお噂を致して居ります。」「近頃ちや閑暇な人は、丸で生きてゐられないのと同なじ事ね。だから自然御互ひに遠々しくなるんですわ。だけどそれは仕方がないわ、自然の成行だから」と清子は語つた。そこで津田は「不満足」を覚える。それだけなのか、関との間で昔の恋人を話題にできる程二人には「余裕」が備わり、それが苦にならない程淡泊でいられるのか。関の妻となつた清子を思はずにはいられない。清子の指に輝く指輪、お延に買った指輪、どちらも人妻ではあつた。けれどもそこには、「宅から電報が来れば、今日にも帰らなくつちやならないわ」という関夫婦の打ちとけ合つた関係と、津田とお延の技巧走つただましあいの関係との落差が感じられるのである。

津田は過去の清子と自分とを見出そうとして昨晚の出会いに話を向けた。けれども清子は津田を疑つたのは「貴方はさういう事(待ち伏せ)をなさる方なのよ」「疑つたのは事実ですもの」と答えて何の苦痛もない。津田の言葉を無邪気に受け入れ何も頓着しない。



かつて津田を信じていた時と変らぬ「信と平和の輝き」の眼で今も変らずやはり存在している。自分を離れて関へ嫁いだ今も「昔の儘の眼が昔と違つた意味で」(百八十八)存在していると思つた時、津田は一種の感慨に打たれた。

何故何故かと問うことをせず、ただひたすらに受け入れる。事実を事実の儘にして疑つたり考えたりしない強い、うつろな心。それは漱石自身の精神生活の中から迷い出た魂が彷徨い求め続けた心かもしれない。

「解釈を拒絶して動じないものだけが美しい。(中略)解釈だらけの現代には一番秘められた思想だ」<sup>(注15)</sup>

やがて来る近代に続く次の時代への漱石の思いは、近代人にとつての大切なものへと変つていく。人の心に入り込む時代精神を深く遠く読み透かしていたのである。

「お互に相手の表情など読み合つては得々としてゐる。滑稽な果敢無い話である。(中略)現に目の前の舞台は、着物を着る以上お面も被つた方がよいといふ、さういふ人生がつい先だつてまで蔽存してゐた事を語つてゐる。

仮面を脱げ、素面を見よ、そんな事ばかり喚き乍ら、何処に行くのかも知らず、近代文明というものは駈け出したらしい」<sup>(注16)</sup>

漱石の思いもこれと同質のものであつたと思われる。(天然自然)の存在とは、社会の進歩を黙殺し得た秘められている世阿弥の花なのだ。漱石が生活する事と死の事の間で思考した想念は(天然自然)の存在として彼をとりまく社会をも、己をも超越し得るのではないか。「肉体の動きに則つて觀念の動きを修正するがいい、前者の動きは後者の動きより遙かに微妙で深淵だから」<sup>(注17)</sup>。しかし漱石に

生きるために働かざるを得なかつた「拙劣な生活者」<sup>(注18)</sup>であつたあまり、觀念と肉体とは引き裂かれて肉体はまぎれもない現実の中に、それ故觀念は己の中にあつたのだ。そういう生活者がここにはいる。

そして津田は、清子から變ることのない「信と平和の輝き」を感じながら彼女の(花)のような「微笑の意味を一人で説明しよう」と試みながら自分の室へ歸つた」(百八十八)彼も又觀念は清子に肉体は現実にと引き裂かれて「拙劣な生活者」の一人なのだ。

漱石のいう(天然自然)の存在がこのようなものであり、津田にとつて清子が忘れ得ぬ「絵」の様な存在であるにしても、清子自身は果して従来小宮豊隆氏を筆頭に人物決定されてきたような「私といふものから離脱してしまつた」<sup>(注19)</sup>聖女なのだろうか。私は決してそうではないと思う。確かに清子には技巧がなく我をおしたてて進もうとはしない。動かすことのできない現実が現実として認め、それを自分でひきとつて考えたり疑つたりもしない。「事実を取り消す訳には行かない」「私の方に貴方はさういう方なんだから仕方がないわ、嘘でも偽りでもないんですもの」(百八十六)と語る。ここで清子は津田という一人の男に対する自分の判断を下している。

「貴方はさういふ事をなさる方なのよ」という言葉の内には、彼女が津田を離れた理由があるのだ。津田はそれに気づかないゆえ今でも崇られてゐる。

つまり津田にとつて「信と平和の輝き」の女——清子は、現実の生活の中で性病の男と結婚し流産し、過去には嫁ぐはずの男を裏切つている「拙劣な生活者」の一人なのだ。

#### IV 彷徨へと不安な魂を追つて

津田にとつてのこれからの人生は、小林の予言した「実戦」を踏んだとしても、おそらくはこれ迄と余り変らないであろう。屈折した、あやしげな道をふみ迷いながら辿る事となろう。津田の内奥と外殻とは幸福と不幸が交錯し続けるにしても、にもかかわらず、清子への愛の過去という深層の意識で、人間をも人生へも愛していく事ができるのではないだろうか。清子、それは津田が生まれて以来三十年余を逆上つて、彼の無邪気だった心をつかんで離さなかつたすべてのもの、ひそやかに胸にくすぶらせ続けてきた「天然自然」の「印象」の総合の象徴であり、その化身であるのだ。清子は化身なのだという事を再認識したとき、津田はまた自分の意志をもって歩き始めるに違いない。そのときは遠くない極めて近い未来にあるはずなのだ。

「其所でびたりと留つた時の彼女は、津田にとつて一種の絵であつた。彼は忘れる事の出来ない印象の一つとしてそれを後々迄自分の心に伝へた。」(百七十六)(傍点金字)

そういう存在として清子を意識することは、既に己から切り離れたものとして認識する以外にはあり得ないからである。

愛から見離された人間がもう一度自分から愛を切り離してながめ直した時、そこに一つの記憶としての愛が新しく生ずる。人はその愛をよりどころに又別の愛を求めて彷徨い続けるのではないだろうか。

自分の回りにいくら拒絶しても拒絶しても確かにある現実、そういう現実には正面から対峙して、その姿を自分自身という内側の鏡に映した時、人は己の人生を思い生活を思う。そして時として人の意識は二枚の偏向板の反射と屈折を通すようにして過去へと向う事が

ある。自分をひきつけて放さないあの時に立ち戻つてみるのだ。しかしそこから飛び出すように再び現実の生活に帰ってくる。それはまるで津田が手術を受けた小林病院の二階から眺められた洗濯屋の日常のように、洗つては干し洗つては干しする営みにも似ている。人は何故思い出を語るのだろうか。

「どの民族にも神話があるように、どの個人にも心の神話があるものだ。その神話は次第にうすれ、やがて時間の深みの中に姿を失うように見える。だが、あのおぼろな昔の人の心に忍びこみ、そつと瓜跡を残していつた事柄を、人は知らず知らず、くる年もくる年も反芻しつづけているものらしい。それにしても、人はそんな反芻をまつたく無意識につづけるながら、なぜかふつと目ざめることがある。わけもなく桑の葉に穴をあけている蚕が、自分の咀嚼するかすかな音に気づいて、不安げに首をもたげてみるようなものだ。そんなとき蚕はどんな気がするのだろうか。」(注20)

確実に生活者だった漱石、生きる為に働かざるを得なかつた漱石。そういう日常にあつて生活する者の思いは何処へ向かうのか。「自分の咀嚼の音に気づいて不安げに首をもたげたとき、大きなそしてつかみどころのない不安を感じたとき、人は眼を自分の中に向けるだろう。孤独に、もつと孤独にならうとする。良い意味での孤独を充実させてその発露を見出そうとする。見出さんとする陣痛こそ精神の漂泊意識へと通ずる。肉体と切り離しきれない精神が不安解消のため動き出すのだ。その彷徨の果てに情熱を注ぎ込むものをつかむ。それがモーツアルトは音楽だつたし、源実朝は和歌であつた。」(注21)

漱石においては彷徨の過程が文学であつたと思ふ。

誰だつて自分の眼を通して以外人生など見られるものではない。この考えに至つた時、自分に語りかけてくるものは思ひ出という名の自分の歴史である。人はなぜ思ひ出を美しいというのだろうか。小林秀雄は書いている。

「思ひ出となれば、みんな美しく見えるるとよく言ふがその意味をみんなが間違へてゐる。僕等が過去を飾り勝ちなのではない。過去の僕等に余計な思ひをさせないだけなのである。」

思ひ出とは必ずしも過去に向けられるものばかりではない。記憶の海から上手に思ひ出を拾ひ上げ、現在の己の居場所を確認すること、思想の故郷に回帰していくこと、それが「過去から未来に向つて始の様に延びた時間という蒼ざめた思想」から逃れる唯一の本当のやり方らしい。しかし現代人には「無常といふ事がわかつてゐない。常なるものを見失つたからである」(注23)。自分の中に自分自身という他人を同居させている近代人の利己心から、自分自身たらんとする意識的な努力をして、意識と行動の間に生じるすきまを感じないですむような生活を求め、恐ろしく孤独な魂が彷徨する。その魂からあふれる悲しいものを浄化する環境を求め、魂がそこに迎りついた時、〈自分の生活〉が生まれてくるのだと思う。彷徨する魂は、事ある度に過去を思い出す。思ひ出をたどっていく。記憶の海に沈んだものを浮き上がらせては〈反芻〉をくり返す、彷徨の中で失つたもの、喪失の確認をし続けていくことなのにな。

こういう思ひこそ漱石が一連の作品の中で〈反芻〉し続けてきた『三四郎』のテーマである〈迷羊〉という青春の認識、『門』の終結にあたって、季節は春がやってきたが「然し又ちき冬になるよ」と答えて下を向いたままの宗助の内心又『道草』では「世の中片付

くなんてものは殆んどありやしない。一遍起つた事は何時迄も続く(注25)のさ」という健三の認識であり、それらは自分の生活の〈咀嚼〉の音に気づいた者の不安な声なのだ。

『明暗』その後にあつても、こういう漱石の継続中の不安は解消することなく長く引きずられていくだろう。それこそ彷徨、漂泊、迷児の内実なのだから。そうして自分の居場所をみつけた時、そこに己を注ぎ込む世界を築く。ここに至つて人は、人と人との執着に距離をもつて、自分の世界の回りに在る自然、社会を〈微笑〉して見つめる事ができるのだ。そうして社会に入り生活する日常に戻つてこられるのではないだろうか。

漱石は最後までその世界を求め続けた作家であつた。こうしてみ

てきた時  
「倫理的にして始めて芸術的なり。真に芸術的なるものは必ず倫理的なり」(注27)

という漱石の辿つてきた文学の軌跡を正しいと肯うことができよう。

『明暗』の停滞、膠着しているかの様な世界に津田が自己の脆弱性の理由を求めることは許されていない。日常を裏切り続ける觀念には自己を感覚だけの純粹世界に限定し、かつ抽象的觀念を脱落させていく経過が問題だ。喪失させたものと自己との亀裂は彼を不安に脅かすが、その不安自体を生きるという選択は『明暗』の底流にあるモチーフであり、その予告をここに見る事ができる。

〈注〉

1 ここで使用したへゝの熟語は昭和五十三年度山崎一穎先生講義・作

家作品研究・(森鷗外「灰燼」)の中で扱われた「悪霊」講義ノートからの引用である。そのノートの項目を記しておく。I スタヴロギンの現代性、II シャートフの思想における「救し」の内実、III キリーロフにおける自由への思考、IV ビョートルの悲劇。更にI、スタヴロギンの現代性において「仮面と素面」へ虚無へ「年よりも早く人生に倦んだ人間の悲劇」へ存在そのものの寂しさへ「成熟II崩壊」へ死による生への認識「生への上昇と死への下降」へ愛憎の重複性へ「自己犠牲の積極面——純抗抵」へ「愛の虚妄性」の項目があげられた。

2 RDレイン『ひきさかれた自己』(一九七七年12月5日第10版発刊)みずず書房刊)所収の第二部「身体化された自己と身体化されない自己」八十三頁。

3 注2に同じ。

4 この節におけるこの発想は注2による。但し八十二頁から百頁。

5 注2に同じ。但し八十六頁。

6 注5に同じ。

7 注2に同じ。但し八十三頁。

8 注2に同じ。但し九十三頁。

9 注2に同じ。但し九十七頁。

10 注9に同じ。

11 夏目漱石『三四郎』(昭和41年3月25日発刊、岩波書店)第七章。

12 注11に同じ。但し十一章。

13 注11に同じ。

14 注11に同じ。

15 小林秀雄『小林秀雄集』12現代文学大系(昭和40年5月25日発刊、筑摩書房)所収の『無常といふ事』三六八頁。

16 注15に同じ。

17 注15に同じ。但し『当麻』二六六頁。

18 江藤淳『決定版・夏目漱石』(昭和50年2月25日三刷・新潮社)所収、第二部『晩年の漱石』第九章『「明暗」それに続くもの』一六八頁。

19 小宮豊隆『漱石全集・第七卷明暗』(昭和41年6月23日発刊、岩波書店)所収の『「明暗」解説』六八一頁。

20 北杜夫『木精』——或る青年期と追想の物語——(一九七五年六月十日発行、新潮社)二四七頁。

21 注15に同じ。但し同書所収の『モオツァルト』三三頁、『実朝』三三頁を読み、魂の発露となる媒体、という発想を得た。

22 注15に同じ。但し三六九頁。

23 注22に同じ。

24 夏目漱石『漱石全集』第四卷(昭和41年3月25日発行・岩波書店)八六四頁。

25 夏目漱石『漱石全集』第六卷(昭和41年5月23日発行・岩波書店)五九二頁。

26 夏目漱石『漱石全集』第八卷(昭和41年7月23日発行・岩波書店)『硝子戸の中』三十九章、五〇八頁「(前略)私自身はその不快の上に跨がつて、一般の人類をひろく見渡しながら微笑してゐるのである。」による。

27 夏目漱石『漱石全集』第十三卷(昭和41年11月24日発行・岩波書店)大正5年5月断片、八三九頁。

〈付記〉

1 本論文は昭和53年度卒業論文として提出した漱石・『明暗』試論——ひきさかれた自己の光と影——全四章のうち、第二章と第四章とを中心にとり、統一をとるため加除、訂正を加えたものである。

2 本論文作成にあたって、定本を『漱石全集』(全十七巻・別巻一・昭和40年12月、昭和51年4月、岩波書店刊)とし、本論文中の引用文はす

べてこれに依りました。

3 本論文作成にあたって、山崎先生が講師をしておられる三鷹市社会教育活動の一つ『鏡の会』のお世話になりましたことを併せ記るして感謝の意としたい。